

中国人留日学生の日本語教育を通して 松本亀次郎が果たした役割について

高 橋 良 江

〔抄 録〕

松本亀次郎は約80年の生涯のうち35年余りを中国人留学生教育に捧げた。日本の公立小学校の平凡な教師であった松本が、なぜ37歳で中国人留学生の日本語教育と深くかかわりを持つようになったのか。その転機は嘉納治五郎の書いた「教育家」との出会いであった。小学校教育の大切さを世に発信した嘉納にあこがれ、その嘉納に宏文学院へ誘われたことである。帰国すれば近代中国建設の中心的役割を担う留日学生を育てることの重大さ、それを実践する方法として①日本語をわかりやすく教授すること②そのために文法を中心とした教科書を作ること③東亜高等予備学校を創設したことである。これらの行動を支えたものは日中親善であった。松本は、日本と中国とが戦うことの愚かさを機会あるごとに訴えていた。小論は日本語教育を通して、自らの思想や実践を行動で示した松本の人物像を遺品である手紙や原稿、著書等で考察したものである。

キーワード 日本語教育 教科書 『国士』 松本亀次郎 日本人教習

はじめに

日本の文化の形成に大きな影響を与えてきた中国は、19世紀以来欧米諸列強のたびかさなる侵略にさらされ、1895年には日清戦争に敗北した。さらに1899（明治32）年にはじまる義和団事件では北京が列強によって占領されるにいたった。このような状況のなかで、清国政府は大規模な変革を迫られ、その中でも近代教育制度の導入が最重要課題となった。

1903（明治36）年発布の「欽定学堂章程」により、近代教育制度が発足した。しかし施設上の不備や教員不足等により、なかなか進展しなかった。1904（明治37）年1月に「奏定学堂章程」の発布により、各省の書院を学堂に改めることで学校制度が整備された。さらに、清国政府は日本政府に対し留学生の受け入れを要請した。それは、近代学校制度及び留学制度が、1300年余り続いた科挙にかわるものである、と位置づけられたからである。それにともない1905年から1910年にかけて1万人を超える中国人留学生が日本に来たといわれる⁽¹⁾。その目的は①日本を通して西洋の学問を学ぶこと②それを中国語に訳して母国に持ち帰ることであっ

た。

一方近代教育建設のために清国政府は、多くの日本人教習の派遣をもとめてきた。日本政府はその要請に応じて、数100人にのぼる日本人教習を派遣した⁽²⁾。清朝政府の招聘に応じて海を渡った日本人教習が果たした役割は大きかった。中国各地の学堂においてその中心となって近代教育に取り組んだ。その学堂の一つ北京の京師法政学堂で教鞭をとった日本人教習松本亀次郎がいた。実藤惠秀は松本について、日本留学史の第1期（1896年～1937年）までの40年間のうち、35年を留学生教育にささげた中心人物であり、また日本語教育の代表者である、と評している。その理由として、明治時代中国人留学生教育をおこなった人々はいずれも限られた時期だけであるが、松本は一生の大半を留学生教育にささげたといってもよい、と述べている⁽³⁾。

本稿は、松本が公立学校を退職してまで、宏文学院に転職した理由をふまえ、日本語教師として近代中国における教育の発展に寄与した松本の人物像を明らかにすることにある。

1 松本亀次郎の前半生

(1) 松本を育んだ土^{ひじかた}方村

1872（明治5）年、新学制が実施されると松本の生まれた土方村では、他の村に先立って近隣15ヶ村連合の小学校が、翌年4月嶺向の寺小屋長寿庵に開設された。それが嶺小学校である。その開設に尽力したのが庄屋の鷺山顕三郎⁽⁴⁾であった。

その後1876（明治9）年4月には、下土方小学校が開かれた。ここに松本の少年時代に大きな影響を与えた松下発三郎⁽⁵⁾が赴任してきた。先の鷺山顕三郎と共に、松本のその後を形成する重要な人物である。1877（明治10）年、当時の師範学校はまだ整備されておらず、教員が不足していたので、「授業生」⁽⁶⁾という制度が設けられて、それを補っていた。

松本はこの授業生になるための試験を受けることになり、尊敬する下土方小学校の先生松下発三郎の指導を受けた。松下は優れた漢学者であり、教育者であった。松本は必死に勉強し、わずか11歳で授業生の試験に合格した。松下は松本が、自校の下土方小学校へ赴任することを望んだが、結局嶺向小学校（明治6年学制改革により改名）で下級生を教えることになった。その時松本は、松下の意にそえなかったことを詫びた手紙を送った。それには

只今迄先生之御恵恩ニ預り候得共、過日当校（嶺向学校）テモ教員入校ニ相成候間何レ茂先生之御教育ニ預り度存候得共、一ト先当教員ニ習度奉存候。⁽⁷⁾

と記されている。そんなことがあった後も、二人の師弟関係は途切れることなく続いた。松本が師範学校在学中、妻ひさと結婚した。それも松下の世話によるものであった。見合いの席で「授業生の頃、成績の悪い子に特に目をかけ、親身に指導した。」⁽⁸⁾と松本を紹介して、ひさを安心させたという。

(2) 静岡師範学校への熱望

松本は授業生としていくつかの小学校に勤めながら、師範学校の入学準備に励んだ。向学心が強く、1882(明治15)年5月から1883(明治16)年2月まで、横須賀の漢学者常盤健のもとに往復4里の道を通して学修した。この時のことについて松本は、1893(明治26)年の高等小学校の正教員免許状取得のための履歴書に次のように記している。

明治十五年五月ヨリ静岡県遠江国城東郡横須賀町常盤健ニ就キ漢学ヲ修メ十六年十二月迄、小学、四書、五経、文選、左傳、国語、史記等ヲ講習ス⁽⁹⁾

また毎日近くの鶴翁山の高天神神社にこもって四書五経を暗誦する猛勉強ぶりだったといわれている。ではなぜこれほど勉強をしたのか。それは教員の資格をとるために静岡師範学校へ入ることを熱望していたからである。この当時貧しいが優秀な若者にとって、師範学校は最高の学び舎であり、公費で教育が受けられる唯一の場であった。静岡師範学校への入学は難しかった。すでに二度も失敗していた松本は、ますます故郷へ帰れなくなっていたが、あきらめるわけにはいかなかった。故郷の鷺山頭三郎や、中谷次郎作⁽¹⁰⁾らの学資援助者に、静岡にとどまって受験勉強をしたい旨の手紙を書いている。そして松本は思いきって直接静岡師範学校長の林吾一に嘆願書を書いた。

校長閣下ニ白ス。不肖素草間ノ一書生ニシテ、晨日郷里小学校ニ在リテ、聊訓導ノ餘力ヲ資ケテ授業ノ助生トナル。然リト雖家素ヨリ窮貧ニシテ、父母亦老衰ス。故ニ奮然身ヲ起シテ修学ニ心ヲ用ウル能ハズ。朝ニ学校ニ昇リテ訓導ノ傍ニ在リテ其授業ヲ助ケ、夕ニ宅ニ帰り僅ニ勉学スルノ暇ヲ得タリ。僅少ノ俸ヲ得テ以テ父母ノ家計ヲ助ク、斯ノ如キ事爰ニ年アリ。爰ニ本年村里戸長学務委員僕ノ不肖ヲ顧ミズ、苦辛ヲ憐ミ、教員ノ免許ヲ得テ村校ノ担任ヲシメントシ、師範学校ニ入りテ修学セシム。愍資ヲ得テ本年二月募集ニ応ジテ出岡ス。時ニ算術熟セサルヲ以テ大ニ誤リ、且諸科共ニ不可ナルヲ以テ入学ヲ免サル能ハズ。不肖爰ニ於テ大ニ愧ズ、慨然トシテ郷里ニ帰ラズ。⁽¹¹⁾

嘆願書の内容は、この試験が自分にとってどれだけの意義をもつか、また不合格になった教科を追試してほしいという趣旨のものだった。結局その嘆願書が功を奏したのか、1884(明治17)年9月静岡師範学校2年に編入学を許可されたのである。松本はこの後も何度も自分に課せられた使命感に従って、思い切った行動をとっている(具体例は後述する。)こうした行動をとらせた背景には、資金援助と激励をしてくれる3人の人たちがいた。幼年時より松本を見守り続けてくれた鷺山頭三郎、義兄で大坂小学校校長の中谷次郎作、教育者として生きる指針を教えてくれた松下莞三郎である。この中でも鷺山は、松本の静岡師範在学中の苦しい生活の間に、何回も手紙を出し学費を送金している。遺品の中に、1884(明治17)年2月と静岡に来たその年だけでも、鷺山の送金したことを知らせる手紙が3通見出される。⁽¹²⁾

(3) 高等師範学校の断念

松本は難関を突破して編入学した静岡師範学校を卒業すると、静岡高等小学校の訓導となった。さらに勉学を続け、1889（明治22）年4月高等師範学校に試験生として入学して三ヶ月後、過労と病気で退学を余儀なくされたのである。

その時のことについて松本は

高等師範学校理科学科試験生トシテ在学中、図ズモ脚気症に罹り、転地療養命セラレ帰郷⁽¹³⁾

と無念の思いを述べている。

高等師範学校を断念した松本は、1890（明治23）年4月、静岡高等小学校東部分校の首席訓導になった。この頃になると教師としての自覚がでてきた。今までと違って、教員の先頭になって働き、ようやく基礎も固まり、保護者の信頼も得られるようになっていた。しかし、もう一度高等師範に復学したい、そんな心境について松本は次のように述べている。

世辞ナガラ、学制改革ノ今日此等ノ言辞ヲ聞クハ頗ル末頼母シク存ジ候。殊ニ創業以来幾多ノ艱難苦楚ヲナメテ、世態人情ノ難キニ処シ、今日迄勉励シ来ルヲ今僅カ三ヶ月ニシテ卒業生ヲモ出シ…。⁽¹⁴⁾

此ノ卒業生中、後来余ガ友トシテ共ニ語ルニ足ル可キ俊才モ乏シカラズ。卒業ノ後、家業ニ就キ、或ハ進ミテ学ニ従フモノモアラン。是等ヲモ見届ケテ適当ノ方針ヲ与ヘズンバ、是迄教育セシ目的ヲ達スルヤ否ヤ知ルベカラズ。実ニ今ハ半途ニモ至ラザレバ是等ノ卒業生ナドニ対シテ無慈悲の至リト云ハザル可カラズ。⁽¹⁵⁾

こういう状況で自分の都合だけで去ることは教師の道に反するのではないかと考えた。

この時本当の意味で教師を一生の仕事にする決断をしたのである。生徒一人ひとりのもっている能力を最大限に引き出すこと、教師は最後まで教師であるが、ここで学んだ生徒はどれだけの可能性をひめているかわからない。この行末を見届けたい。その思いで小学校教育にうちこもうと決心した。その後自分の考えと同じことを述べている嘉納治五郎の文章に出会う（後に詳述する）。

この後、1897（明治30）年7月文部省中等教員検定試験に合格、師範学校の国語教諭として9月より母校静岡県尋常師範学校を皮切りに、1898（明治31）年4月三重県師範学校、1900（明治33）年10月佐賀県師範学校教諭として歩みだしたことが、のちの留日学生教育とむすびつくのである。

2 転向の動機

（1）佐賀県師範学校時代

松本がこの学校に来たときの校長は江尻庸一郎である。江尻はかつての静岡師範・静岡中学在職中の校長でもあった。おそらく松本を佐賀県師範学校へ招いたのも江尻校長であると思われる。江尻は当時佐賀県教育会（教職員団体の会）会長を務めていた。この会では、佐賀県の

方言を収集しており、それに基づいた方言辞典を編纂するという仕事に佐賀県中学校教諭の清水水平一郎と松本が選ばれた。

この辞典は、1902（明治35）年6月15日に出版された日本で最初の方言辞典である。出版された方言辞典の冒頭には、東京帝国大学の国文学教授の上田萬年の手簡⁽¹⁶⁾が掲載されている。それには「元来此事業は頗る容易に似て、決して容易にこれなく候間、御励精御尽力の上完全無欠なるものを御編纂相成候様致度。其成就致候暁には、我邦の教育上及び學術上に貢献するところ蓋し。鮮少にあらざるべしと存候。右貴会の事業に対し、ここに慶祝の意を表す」とある。⁽¹⁷⁾松本家の遺品の中には『佐賀県方言辞典』の原稿も残されている。

この「佐賀県方言辞典」の出版は、松本らに自信を与えると同時に、初めて国語学者として世に認められたものであった。一冊の本を仕上げて、上田萬年らの研究者たちにその実力を認められたことは、何物にも代えがたい満足感であった。

松本は小学校・師範学校で15年間、国語科の教員を続けてきたが、1903（明治36）年37歳のとき突然辞職して、まったく未知の、中国人留日学生に日本語を教えるという仕事に飛び込んでいった。それはなぜだろうか。その動機には諸説がある。①宏文学院には国語学の人材が揃っていたこと、公立学校での恩給がついたので新しい道に転じたかったこと、②ことによると彼は公立学校の教員生活に行きづまりを感じていたのかもかもしれないという説もある。⁽¹⁸⁾また③東京転勤の年8月31日には父市郎平が他界していることから、郷里静岡に近い所に戻りたいという希望が強かったからだとかえるという説もある。⁽¹⁹⁾

転職理由として第1に考えられるのは、前記の『佐賀県方言辞典』の編纂によって世に認められた自信、第2は次の文章との出会いであるとかえる。これは嘉納治五郎が雑誌『国土』に発表した論文「教育家」である。少し長いが重要なのでここに記す。

然るに世間動もすれば中学小学等の教員を輕んじてかくの如き職業は、第一流の人士の従事することに非ざるかの如く考ふるものあり。我等は、之を以て大なる誤とするものなり。固より一国には多数の中学教員を要し、又更に多数の小学教員を要す。故に此等多数の中小学教員をして、盡く第一流第二流の人士たらしめんことは、固より望んで得らるべきことに非ず。然れども此等の職業は、第一流の人士も、従事して決して恥づべきことに非ず。また第一流の人士にして之に従事すれば、他の政治軍事、又は実業等に従事するに比して、敢て劣る事なき結果を來すを得ることは、我等の主張する所なり。小学教員の如きは、之を施す時代の、之を受けたる児童が、他日世に立ちて終生の業務に従事する時代と頗る相隔たる故を以て、其小学教育の結果の他日に及ぼす影響の果して幾何なるかは、判然見るべからず。然れども若し真に有力なる教育家ありて、小学時代の教育を担当し、児童の将来の心身発達の基礎を完全に造出し加之間接にも小学以後の教育の指導を為すことを得ば、幾多の児童中よりは、他日各方面に於て大なる功績を立つべき人物を出すこと能はざる理なし、今日尋常の学識、尋常の才能を有する人にも、多年小学教育に力を尽くしたるが

為、其人の薫陶を受けたる児童の後年に至るまで其人を慕ひ、其人の指導を受けて一身の方向を定むる場合少からざるは、世人の知れる所なり。況んや天下第一流の人才にして、終生斯業に従事せば、其の指導を受けんことを欲するもの固より多かるべく、又其の教育せる児童の将来従事する各般の事業に及ぼす影響の何如に大なるべきかは、之を推測すること難からず。⁽²⁰⁾

嘉納は世に出ていない優れた人材を見つけだすことを常に心がけていた。彼は師範・中学校の教諭だけでなく、小学校で真に力のある教育家が多年小学教育を担当すれば、児童の将来の心身発達の基礎を作ることができると強調している。今までの教育界において、小学校教育の大切さをこれほど世に向けて発信した人物はいなかった。

嘉納の文章が『国土』に発表されたのは1901（明治34）年7月、『佐賀県方言辞典』が刊行されたのが1902（明治35）年6月、その『佐賀県方言辞典』により上田萬年に認められ、嘉納の宏文学院へ誘われたのが1903（明治36）年4月である。嘉納が中国を訪れたのは1902（明治35）年7月、宏文学院の教授陣の強化が迫られた時期でもある。

松本は宏文学院の教師となった動機を後年留日学生の汪向榮に質問された時、次のように述べている。

私は幼い頃から中国の書物に好感をもっており、『四書』『五経』といった漢文を、ほかの人は苦手としたが、私は愛読した。その「漢籍」から多くの知識をえたので、清国に対して、自然に愛慕の気持ちが生じた。当今は中国の国勢が不振であるが、この国家と民族は永遠にこのままでありつづけるはずがないと信じ、私の愛慕する国家のために仕事をしようと考えて、嘉納先生が招いて下さったとき、喜んで応じたのである。今日私の教育している学生は、いずれ中国の中心になるものと、私は信じている。⁽²¹⁾

松本は、小学校教育の大切さを認めてくれた嘉納からの誘いを心待ちにしていたのだと思う。宏文学院へ行くことで今後の自らの人生を託そうとしたのである。そこにおいて留日学生に日本語を教えることは自分の天命だと感じた。

（２）宏文学院における松本

中国から留日学生が来るようになったのは、1896（明治29）年日清戦争終結の翌年であった。清国政府は13名の官費留学生を日本に送ってきた。当時高等師範学校校長であった嘉納治五郎は、文部大臣兼外務大臣西園寺公望の依頼を受けて、この最初の留学生の教育を引き受けた。嘉納は、この13名の留学生のため神田に塾舎を設け、同校教授本田増次郎を主任として数名の教授を招聘して、日本語・日本文法及び普通科の授業を始めた。これが日本における最初の中国人留学生教育である。

松本は1903（明治36）年4月から1908（明治41）年2月まで宏文学院で勤務した。嘉納が松本を招いた動機は、小学校教師としても、教授法や国文法においても一流の実力を持っている

と判断したからである。これらの条件は、中国人留学生に日本語を教える適任者と思われる。前述の『国士』教育論の中でも述べているように、小学校教育の重要性を説き、自分に期待してくれている嘉納のもとで仕事をしたかったのである。その時のことを松本は回顧談のなかで次のように述べている。

老生初めて支那留学生に日本語を教授したのは明治36年即ち老生が37歳の時、嘉納治五郎先生の宏文学院に雇われた時である。

この当時の宏文学院には速成師範科、速成警務科、普通科があった。…僕が教授した班は、普通科は浙江班、速成科は四川班と直隸班であった。⁽²²⁾

またその当時、日本語を教えていたある日の授業風景を記している。

普通班は卒業後、高等学校或は専門学校に入学して日本の学生と同じく教授の講義を聴かねばならぬから、日本語の学習には熱心であった。…僕は他の講師が去った後を引継いだので彼等の日本語は既に相当程度に達してをった。或日、助詞の^にに漢字を充てる必要が生じ、^にには漢字の^于又は^於に当ると黒板に書いた処が、万家福氏が^于於と二字書くには及ばぬ。^于でも^於でも一字書けば同じだから宜しいと言ひ出した。処が僕にして見ると、その時分はまだ支那語で^于於の二字が同音であることは全然知らないし、「操觚字訣」や「助辞審詳」などで面倒な使ひ分けを習つて居たので、それが無区別だ、一字で用が足りる、と言はれて些か面喰った恰好であつたが、その時魯迅が言を挿んで^于於が何処でも全く同じだと言ふのではない。^にに当る場合が同音同義だからどちらでも一字書けば宜しいと言ふのですと説明した。それを聴いて僕は漢文字の使用法は本場の支那人と共に研究する必要の有る事をつくづく感じさせられた。

さらに、松本は魯迅のことをこう記している。

魯迅は少年時代から凝り性であったので日本文の翻訳も尤も精妙を極め、原文の意味をそっくり取って訳出しながら、その訳文が穩当で且流暢であるから、同志間では「魯訳」と云って訳文の模範として推重したといふ事である。⁽²³⁾

このように秀れた留日学生から学ぶ点は多かったと推察される。松本が宏文学院で留日学生に日本語を教えていた当時（明治30年代後半）の先輩教師に三矢重松（高等日本文典の著者）、松下大三郎（国歌大観、標準日本文法、標準漢文法の著者）、井上翠（日華新辞典、支那語辞典の著者）、難波常雄（支那人名辞書の著者）、佐村八郎（国書解題の著者）、柿村重松（和漢朗詠集考證の著者）等⁽²⁴⁾がいた。彼らは後の日本文法学の大家になった人々である。

（３）教科書作り

松本は、ある程度基礎の日本語や漢語の学習ができている留日学生について、次のように述べている。

教授者被教授者双方共彼此の会話に通じないものが文法を教えるのは難儀であつたが、

短時間に日本語文を最も効果的に教へるにはどうしても文法を教へねばならぬ必要がおこってきた。⁽²⁵⁾

松本は、日本語教育の問題点は文法にあることに気づいた。そこで、宏文学院教務長の三沢力太郎（後湖北省の教習）の支援と学生たちの要望とにより、日本語文法の教案を作った。それをもとに宏文学院の日本語教授らの総意で、翌1904（明治37）年7月に『言文対照・漢訳日本文典』として出版された。この書物は松本の名声を一挙に高め、その後40版を重ねて昭和の中頃まで、留日学生の間に広く活用された。この文法書の中国語の訳文づくりには、後に中国の教育界で活躍した陳宝泉・高歩瀛・王章祐⁽²⁶⁾らが当時学生として参加していた。

つづいて嘉納の呼びかけで日本語教授研究会が結成された。松本の『文法教授案』を中心に1年余りの論議の末、1906（明治39）年6月『日本語教科書』全3巻が出版された。

宏文学院でのこうした教科書作りの成果が、松本を北京京師法政学堂の教習の招聘へと結びつけたのである。以下は松本の著した日本語の教科書である。⁽²⁷⁾なお①②は宏文学院の教員による力添えが大きかった。

①『言文対照 漢訳日本文典』	1904年7月	40版
②『日本語教科書』全3巻	1906年6月	19版
③『漢訳 日本語会話教科書』	1914年6月	17版
④『漢訳 日本口語文法教科書』	1919年10月	24版
⑤『訳解 日語肯綮大全』	1934年4月	13版
⑥『華訳 日本語会話教典』	1940年9月	2版

（４）嘉納治五郎と松本の共通点

嘉納についていろいろ調べていく中で、松本と多くの共通点があることに気づいた。嘉納は当時、高等師範学校の校長であり、日本の師範教育の中心にあり、清国でも日本の教育界の第一人者として評されている人物である。一方松本は「努力を糧とする仕事人」と卑す無名の日本語教師にすぎなかった。にもかかわらずこの両者を比較してみると、類似点が実に多いのである。

① 幼少時代

嘉納は自分の事を次のように述べている。

自分は性来人を教えることに興味を有していたので、幼少の時分、四書の素読を教わっていた頃、自分より年少のものを集めて、いろいろの文字を書きぬいて教えたこともある。自分にとって、人に物を教えるということが一種の楽しみであったのであるからでもあらうと思う。⁽²⁸⁾

松本も前述したように授業生として、最初の下級生を教え始めたのが11歳。その後16歳で義兄中谷次郎作の招きで大坂小学校の授業生となる。中谷は初めて松本に出会った時「この青年

は、教師が天職であると確信した」と述べている。⁽²⁹⁾ 嘉納と松本は共に幼少の頃から、教えることに對して秀でた資質をもっていた。

② 中国人留学生に対する考え

嘉納は留学生教育について、次のように述べている。

支那人の本邦に來遊するは固より賛成するところにして現に過般來、弘(宏)文学院⁽³⁰⁾なるものを起して其養成に努めつつある。今後益々彼らの教養には力を尽くす積りなり。殊に支那留学生を欧米諸國に派遣せしむ可きや或は我邦に渡來せしむ可きやの問題に就きては自分は最も日本に留学せしむるの得策たるを信ずるものなり。其の理由の重なるものは経費の多少は勿論、第一彼我道德主義の根底を一にすることは最も養成に便利を感じるところにして、留学生自身も異文異教の土地に於て修業するに比すれば、其感覺も同日の談にあらざる可し。要するに支那と欧米との文化程度事情等は懸隔甚だしきに過ぎるがゆえに、支那留学生の養成するところとしては本邦を以て最も適當とす可きなり。⁽³¹⁾

松本も留日学生の心得について次のように述べている。

温乎たる同情を以て、彼らの生活を助成し彼らの安全を保証し、彼らの祖先以來最も好きな學問教育をさせる様に導くのである。彼らの生活が安定し、意欲満足が英米露佛に依存するよりも日本に信頼する方が事實増しであるならば何を苦しんで、同文同種の日本を離れて目色毛色の違つた異人種に就くものですか、興亜教育もその一部を為す日本語教授も実利実生活に副ふようにせねば無効である。⁽³²⁾

とくに松本は欧州へ留学するより、日本へ留学した方が実生活において得策だと思わせなければ意味がないと考えている。

③ 留日学生のための学校創設と教育視察

両者はともに清國に好意的だったが、松本の場合は、留日学生の學習の目的は日本語の1日も早い修得と日本人の思想、日本歴史、日本文化を學習し、実践させることであった。⁽³³⁾ したがって直接授業の中で政治・軍事について語るようなことはしなかった。

嘉納は宏文学院を創設するにあたり、このように述べている。

今回宏文学院といえる学校を起し、清國よりわが國に來たりて、諸種の學問をなす学生のために便宜を与うることとなり。この学校においては、清國學生に日本語を教授し、また普通教育を施し、各種専門學校に入るの予備をなさしむる計画なり。⁽³⁴⁾

しかし、日本最初の中国人留学生の教育機関として期待を集めていた宏文学院も、1909(明治42)年7月に閉校した。その時の様子を松本は次のように回想している。

嘉納校長は「本學院は最初支那から依頼が有つた為に設けたが今は依頼がなくなった為、閉鎖するので學院として尽くすべき義務は茲に終わりを告げた訳である。」といふ様な趣旨を述べられた。榮枯盛衰は世の常とはいひながら余りの無常さに並み居る教職員や自分は無量の感に打たれた。⁽³⁵⁾

その時の松本の思いが、1914（大正3）年12月留日学生のための学校「日華同人共立東亜高等予備学校」を創立した原動力かもしれない。予備学校創設という事業は同じであっても、嘉納の依頼者は清国政府であり、松本の依頼者は一人の留日学生であったことに大きな意味がある。

3 日本語教師としての歩み

（1）京師法政学堂時代

1911（明治44）年10月10日武昌で辛亥革命の口火がきられ、革命軍が武昌と漢陽を占領して、湖北軍政府を組織した。その余波は全国におよび、1912（大正元）年1月1日南京に中華民国が誕生した。このような状況の中で松本は、政治や軍事から常に一定の距離をおき、あくまでも日本語教師としての本分を忘れないように心がけていた。北京滞在は1908（明治41）年3月から1912（大正元）年4月までの4年間であった。

松本は11歳から授業生をかわきりに、小学校訓導・高等師範学校教諭・学堂教習の生活を送ってきた。留日学生の教育に専念するようになったのは、目先の損得からではなく、自分をここまで引きたててくれた嘉納に対する感謝の気持ちと、漢字の素養を身につける中で中国から受けた文化への尊敬や理解を深めることができたからだと思われる。

松本が京師法政学堂で得たものは、一つは日本語教育の内容および方法を中国において実際に検証・実践することができた点（しかし授業に関する資料はほとんどない）。二つめは教育の現場を通して松本の交際範囲が著しく広がったことであろう。松本は北京に在留している日本教習および日本人の様子を次のように述べている。

其の頃、北京大学には服部宇之吉博士、法律学堂には岡田朝太郎・小河滋次郎・志田鉦太郎・松岡義正諸博士、財政学堂には小林丑太郎博士、巡警学堂には川島浪速氏、町野武馬氏（少将）北京尋常師範学堂には北村沢吉博士、藝徒学堂には原田武雄・岩瀧多磨諸氏が居られた。又公使館には公使として初め林權助（男爵）後に伊集院彦吉（男爵）書記官に本田熊太郎氏（当時参事官）松岡洋右氏（当時一等書記官）広田弘毅氏（当時三等書記官）公使館付武官に青木宣純中将（当時少将）本庄繁大將（当時大尉）などが居られ、碌々僕の如きも北京に居つたればこそ其等の人々の声咳に接し、一面の識を忝うするを得たのは責めてもの思出と言わねばならぬ。⁽³⁶⁾

北京で得たこの人脈が、その後東亜高等予備学校の設立にあたり、物心両面で大きな援助をえることになった。

（2）東亜高等予備学校の創設

1911（明治44）年の辛亥革命後、革命に参加した者や、もと留日学生が再び日本にやってきた。北京から帰った松本は東京府立第一中学校の教諭をしていた。そんな時、湖南省出身の曾横海⁽³⁷⁾が、松本に日本語講習会の講師を依頼してきた。湖南省出身者だけでも400人以上の留

日学生がいることを知ったので、1914（大正3）年松本は私財を投じて学校を設立する決意をする。その時の松本は「留日学生に日本語を教えられる人は、そうざらにはいない。その上、日本人には差別意識が強く、好んで中国人教師になろうとする人は少ない」と感じていた。創設の動機について次のように述べている。

初めは湖南省留学生曾横海氏の請ひに依り、有志学生の教授に従事して居つたが、新規学生の渡来する者が際限無く、(1914) 大正三年正月、遂に意を決して、杉栄三郎・吉沢嘉寿之丞両氏にも設立者に加名して貰ひ、予は設立者兼校長と成った。この校名を『日華同人共立』とした。「日華同人共立」とは曾横海が精神的に尽力してくれて発足したのを記念するためであった。⁽³⁸⁾

そんな松本の生涯をかけた思いも、1923（大正12）年9月1日関東大震災により一瞬のうちに無になってしまった。その時の状況を松本はこう回想している。

坂を下りて我が東亜高等予備学校の焼けあとを訪へば校舎の他はただ鉄柵と石門が残っているのみで、さしも宏壮を誇った三階建五百三十坪あまりの校舎と住宅は全部焼けて白い灰となり、玻璃は溶けて膠の如く、鉄柱は曲がってごむ管の如くになって倒れているのを見ては、いかに火力の強かったのかといふことが、想像され、去るにしのびなかった。⁽³⁹⁾

しかし、松本の東亜高等予備学校は、震災後の東京で最も早く授業を再開した。松本はその時の様子について

復興の第一着手として、事務所兼教場を、中猿楽町の焼跡に建てる事に決した。其の焼瓦や灰燼は人手を借りず、牧野事務員、栗原小使自身、畚に載せて校外に運び出し、校地の周囲には、杭を打ち、鉄条を張りて、境界を正し、同年十月五日には、早くも仮校舎が出来上ったから、予はここに移住し、十日から授業を開始した。震災後僅に四十日で、小規模ながら、自力で建てた校舎で、授業を開始し、復興の産声を上げたのは、痛快であった。⁽⁴⁰⁾

と述べている。

松本は困難に出会うほど、負けじ魂を発揮した。それは「努力を糧とする仕事人」としてがむしゃらに人生を切り開いて来た強さであろう。そんな松本を北京時代からの同僚たちや東亜高等予備学校で学んだ学生たちはどのようにみていたのだろうか。ここに1930年代東亜高等予備学校で学んだ趙安博の、「私の一高時代」という一文がある。

東亜高等予備学校は松本先生が1914年に創立された学校である。1917年には周恩来同志が日本に留学しているが、やはりこの学校で勉強された。わたしがこの学校に入学したとき松本先生はすでに頭髪に白髪がまじり、古希にちかいお年だった。先生の授業は活発さがあふれており、疲れなど毛ほどもみせず講義された。学生の出す難問にもいちいち根気よく答えてくださる。先生はまた、中国の留学生が一日も早く日本語を物にできるようにと、ご自分で何冊も日本語のテキストを編集された。それらのテキストはわたしたちの勉強に

大いに役立った。⁽⁴¹⁾

また京師法政学堂の同僚であり、東亜高等予備学校創設の援助者でもある杉栄三郎は、松本を評してこう述べている。

予が松本亀次郎君を知ったのは、(1908) 明治41年、君が清国政府の聘に応じ、京師法政学堂の教習として、北京に来任せられた時に始まり、爾来君の終生を通じ、親交易らざりしものである。…君は本学堂の教習として、実に多大の成績を挙げられた。其の因由は、固より君が兼ねて、系統だてゝ研究せられし国語国文を、熟達せる教方により、授業せられしことゝて、当然のことではあるが、原来教育は、学問の深淺、教授法の巧拙のみによって、成果を決するものにあらず、人格が大いに關係するもので、殊に中国に於て然りである。君は資性温厚篤実の君子人であつたので、其の人柄は、真に学生の胸裏に反映し、学生は君を敬信し、忠実に其の教授を習受した。これが此の成果を齎した一大因由である。…独り直接教育のみを云はんや。君には、又多数の著述あり、…之に因て、海の内外を通し、日本語、日本文を諒解するに至りし者も尠なからざるべく…君が其の著述によって、日本学の進展に貢献せられし功も、亦逃す能はざるところなり。⁽⁴²⁾

杉のこの一文は、松本の京師法政学堂での教習としての姿勢や教科書が留日学生に与えた影響などを実によく描いている。

また松本の最後の教え子と自認している汪向荣は次のように語っている。

松本先生はごく普通の日本人で、最近まで日本でもさほど知られていなかった。しかし、中国人からすると忘れることのできない人物であり、とりわけ、中国近代史上における日本留学生の貢献を論ずるときには、この純朴で、理路整然と教えられた老教育家を忘れることができない。⁽⁴³⁾

と、その人柄について讃えている。

（３）留日学生に対する教育観

松本はその履歴において、嘉納のように恵まれた環境で育ったのでもなければ、他の多くの国文学者・教育者のようにある程度親の財力によって教育を受けて、教師になったものでもない。静岡の田舎で農業兼木挽き職人の息子として生まれ、11歳の頃から教育の現場に立ちつづけてきた。その中で様々な人々の援助によって日本語の研究をし、宏文学院で留日学生と接する中で独自の教育観を持った。それは常に両国の教育者と留日学生との立場が平等で心が一つになることであった。

彼は最初から、ある思想や信念をもって留日学生の教育にとりくんだのではない。嘉納に認められ、留日学生との交流の中で、初めて会得した日本語教育であった。松本はその留日学生教育の目的についてこう述べている。

最も多くの人々の念頭に存する者は、日華親善の四字に在る様である。日華親善固より可で

あるが、予が理想としては、留学生教育は、何等の求める所も無く、為にする事も無く、至純の精神を以て、蕩々として能く名づくる無きの大自然的醇化教育を施し、学生は楽しみ有るを知って憂ひあるを知らざる楽地に在って、渾然陶化せられ、其の卒業して国に帰るや、悠揚迫らざるの大国民となり、私を棄て公に殉ひ、協力一致して国内の文化を進め、統一を計り、…独り日本のみならず、世界各国に対しても親睦を篤くし、厳然たる一大文化国たるの域に達せしめるのが主目的で、日華親善は、求めずして得られる副産物であらねばならぬと考へるのである。⁽⁴⁴⁾

松本は、両国に理解のある真の日華親善を図る条件としての概略を次のように述べている。

- ① 今日までの親日も排日も日本の政治家の対支政策の反響であって、国民に対して排日を唱えたことはない。政治家の言動が日華親善の教育に及ぼす影響の大きさを考えてもらいたい。
- ② 日本国民の中には、今日でも日清日露戦争に勝ったことで、民国人を軽蔑するような言葉をはくものがあるが、慎んでもらいたい。まして世の中の指導的立場にある人の民国人を嘲弄する発言は留日学生に不愉快な感情を与えるので謹んでもらいたい。
- ③ 留日学生は父母の国を離れて、孤独で不自由な生活をしている。しかし、彼等は国に帰れば、政治家、軍人、実業家、教育者等国家の要職につく人々である。日本人はもっと敬意と同情の気持ちで接してもらいたい。特に、子供がむやみに民国人をののしる癖を戒めてほしい。
- ④ 留日学生の心得として、志を立てて国を出た以上、死すとも還らないぐらいの気概を持ってもらいたい。
- ⑤ 最も留意する事は、専門学科の研究はもちろんであるが、さらに日本人の尊皇心、愛国心、敬祖心、武士道等の国民性を学んでほしい。平素から日本の各階級と交際して、日本人と意志の疎通を図る努力をしてほしい。

そして最後に「日華両国は車の両輪の関係」であり、「共存共栄は天命として両国がしなければならない使命である」と結んでいる。⁽⁴⁵⁾

松本の人間性は日本語教師としての実践活動を通して形成され、留日学生と接する中で磨かれていった。戦争を否定し、両国との親善が日本語教育という手段で、結ばれてほしいと願っていたのである。

(4) いかにして民国人に接するべきか

松本はすでに長い留日学生教育者として、中国の指導層にも尊敬されていた。また4年間の北京での京師法政学堂の教習経験により、日本の中国と関係のある政治家や官僚、軍人ら多くの知人をもっていた。

1930(昭和5)年の4月3日から松本は中国教育視察の旅に出かけている。同行者は東亜高

等予備学校⁽⁴⁶⁾の吉沢寿之丞、小谷野義万、日華学会⁽⁴⁷⁾主事小川義彌である。その旅行の記録と感想をまとめた『中国教育視察紀要』の最後に、次のようなことを述べている。

民国は今や民族的に目覚め、『民国は民国人の民国だ、民国内に於ては、領土、法権、政治、経済、文化、教育の全般に渡り、他国の侵略を許さぬと云う思想』約言すれば、『打倒帝国主義』なる思想は、可成り濃厚に行き渡り、殊に小中学生徒に対して、鼓励が最も能く行き届いて居る。この時に当り、日本人が、僅かに一日の長を待み、依然として日清日露両役戦勝の旧夢より目醒めず、『民国人は個人主義だ』『国家的觀念が乏しい』『全国統一など出来る者か』『憲法政治なぞ河清を待つ類だ』などと言って、見くびつて居たら、大間違ひである。言うまでもなく、民国の民族的に目覚めたのは、阿片戦争以後、最近に至るまでの列強の圧迫に刺激されたもので、言い換えれば、列強の圧迫そのものが、民国を覚醒したと言ってよろしいのである。⁽⁴⁸⁾

重ねて言うが、真の提携は相知り相信ずるの者の間にのみ行わるべきもので、其の点に就いては両国家相互の関係も、個人相互の交際と毫も変わりはないはずだ。この点、単に我が国人に対して警告するのみではない。民国人の日本研究に対しても、皮相の観察の下に、軽々に対日策など云為するならば、それも同じく国家を誤る基であることを断言するに憚らぬ。⁽⁴⁹⁾

この内容を含む関係論考は『中華五十日游記 附・中華教育視察紀要・中華留学生教育小史』としてまとめられ、1931（昭和6）年7月日中関係の著名な人々に贈られた。それに対する自筆の礼状が松本家の遺品の中に多数残されていた。⁽⁵⁰⁾その中にポツダム宣言を受諾した敗戦時の総理大臣鈴木貫太郎の礼状がある。松本にとって重要なことは満州事変を回避してくれることであつた。鈴木への返書には、

拝啓 貴著中華五十日游記及中華教育視察紀要、今般杉博士ヲ経テ御寄贈ヲ辱ウシ候段感謝ノ至ニ有之。其由縷々拝読可仕、尚永ク書宝ノ珍トシテ保存可致候。将又御挨拶中、对支事件ニ関スル御憂慮ハ、全ク御同感ノ次第二御座候。先ハ不取敢謝辞申進度、如斯御座候。⁽⁵¹⁾

とある。この手紙の中で政治家鈴木が「对支事件ニ関スル御憂慮ハ全ク御同感ノ次第二御座候。」と返事してくれたことに対し、松本は今後の政局に対して一定の期待をしていた。

松本はその後1944（昭和19）年故郷土方村に疎開して、この年の4月19日、鈴木内閣の成立を知った。遺品の中に、この内閣の成立を告げる新聞が数部保存されていた。⁽⁵²⁾この内閣に関する記事が残されているということは、かつて手紙をくれた鈴木が、この戦争を終結させてくれる内閣になることを願っていたからだろう。

鈴木は軍事力の違いから日本がアメリカとの戦争は始めから無理なことを主張していた。鈴木自身の自伝の中にこんな記述がある。

由来余は太平洋戦争の勃発を極力避けるべきであることを念願としていた。またこれを海

軍の勢力から考えてみても、ワシントン会議で米英と日本の海軍比率は五・五・三に定められ、…三は五に勝道理がないことは判り切っていた。⁽⁵³⁾

むすび

この小論は松本がある時期を境に、留日学生教育に生涯尽くそうとした思いの原形を探ることが目的であった。それはいつ頃から、どんな形で、どんな動機からであったのか。それは嘉納治五郎の教育理念にふれ、宏文学院に招かれることから始まる。そこで多くの留日学生に出会い、6年後京師法政学堂で自分の歩む道を確認したのであろう。

汪向栄はこんな言葉を述べている。

松本先生は行動をもって自分の言った事を証明された…それゆえ、私は少しずつ彼がわかってきだしてから、先生のことを偉大であり貴い人だと思うようになった。特に歴史的な観点から見れば、松本先生は新中国建設に身を投じた沢山の留学生を直接に教育したばかりでなく、その著作を通じて中国が近代化するために必要な知識の吸収に助力したという点でも、間接的に人材を養成されたといえる。この事は中国の近代化に大きな作用をもたらした。彼は一介の普通の教師にすぎなかったが、彼の功績は偉大であり、不朽である。

(54)

さらに汪向栄は、多くの日本人教習の中で中国のことを本気で考えてくれたのは松本亀次郎と井上翠の二人だけだ、と述べている。

松本は明治から昭和と続く日本の中国侵略政策に反対し、日本の対中国政策を批判した。そして留日学生を教育する意義は、彼らの国のためであって、決して日本のためでないことを日本語教育を通して示した。

本論は松本の人物像に焦点をあてることによって、なぜ留日学生を教えることになったのかを、遺品の手帳・書簡・原稿等の資料をもとに考察してきた。松本の中国に対する認識は、生涯一介の教師としての生き方を貫いたからこそ培われたものであろう。その教育観は、40年余りの日本語教育の実践から生まれてきたものである。松本が没して65年が過ぎた現在、中国でも日本の明治精神の発掘が脚光を浴び始めている。そういう意味で松本亀次郎の研究は、今後も日中両国の真の交流とは何かを考えるうえで意義がある。

〔注〕

- (1) 汪向栄『清国お雇い日本人』（朝日新聞社 1991年）187頁。
- (2) 同前。214頁。
- (3) さねとうけいしゅう『中国留学生史談』（第一書房 1981年5月）340頁。
- (4) 増田実『教育と人物』（開明堂 1970年3月）114頁。
- (5) 同前。27―28頁。

- (6) 生徒でありながら、教師の仕事を補助し、下級生を教えるという当時の特殊な制度。
- (7) 松本家遺品。明治10年11月25日嶺向校授業生松本亀次郎が下土方校の松下発三郎先生にだした手紙。
- (8) 武田勝彦『松本亀次郎の生涯—周恩来・魯迅の師—』（早稲田大学出版部 1955年11月）49頁。
- (9) 注(7)に同じ。履歴書より。
- (10) 同前。中谷次郎作（義兄）、大坂小学校の校長、とくに松本の静岡師範学校在学中の金銭的援助と助言の手紙が多数残されている。

明治17年3月、同年9月、明治20年4月23日、同年11月16日、明治34年2月27日。
- (11) 同前。嘆願書。明治17年8月松本亀次郎が静岡師範学校校長林吾一にあてたもの。
- (12) 同前。鷲山顕三郎の手紙①明治17年7月20日②9月30日③11月6日。
- (13) 同前。明治22年7月の御届（有渡安倍郡長にあてたもの）。
- (14) 同前。1892（明治25）年、東有渡高等小学校初代校長兼訓導となる。
- (15) 同前。注(14)の続きであるが、亀次郎書簡草案による平野日出雄の『松本亀次郎伝』より。152頁。
- (16) 佐賀県教育会（松本亀次郎・清水平一郎共著）『佐賀県方言辞典』（図書刊行会 1902年には佐賀県教育会に上田萬年（国文学者）の手紙と江尻庸一郎の文章が序文に載っている。松本・清水は著者として記名されず、序文の中に紹介されているのみ。「是を以て、本県中学校教諭、清水平一郎氏、及び、師範学校教諭、松本亀次郎氏に依嘱し、これが編纂を乞へり」とされているにすぎない。
- (17) 『佐賀県方言辞典』（図書刊行会 1902年）1975年2月の復刻版。6頁。
- (18) 平野日出雄『日中教育のかけ橋松本亀次郎伝』（静岡教育出版社 1982年）164—165頁。
- (19) 二見剛史「教育者松本亀次郎に関する一考察」（鹿児島女子大学研究紀要 第3巻第1号 1982年）118頁。
- (20) 嘉納治五郎「教育家」『国士』第4巻第34号（明治34年7月）724—725頁。
- (21) 注(1)に同じ。236頁。
- (22) 松本亀次郎「隣邦留学生教育の回顧と将来」『教育』第7巻4月号（岩波書店 1939年）538頁。
- (23) 同前。539頁。
- (24) 同前。541頁。
- (25) 同前。540頁。
- (26) 高歩瀛は呉汝綸門下の秀才、宏文学院の速成師範科に学び、民国では社会教育長、その後北平師範大学で中国文学を担当。陳宝泉、王章祐は政治委員。
- (27) 注(1)に同じ。243頁。
- (28) 『嘉納治五郎大系』第12巻（本の友社 1998年）。幼少の頃、門人の落合寅平に口述させたもの。109頁。
- (29) 注(8)に同じ。17頁。

- (30) 『嘉納治五郎大系』第11巻(本の友社 1988年)169頁。当初は弘文学院と称したが宏文と改めた。理由は乾隆帝の諱が弘暦であるため、留学生の中にこれを好まぬ者があったため、宏文と書くようになった。
- (31) 『時事彙報』『嘉納氏の清国大留学生談』(雄松堂 1902年)37頁。
- (32) 注(22)に同じ。548頁。
- (33) 松本亀次郎の日本語教科書①～⑤、天皇崇拜に基づいた思想『華訳 日本語会話教典』(有隣書房 1931年)124頁—125頁。
- (34) 嘉納治五郎『嘉納治五郎大系』第6巻(本の友社 1988年)293—294頁。
- (35) 注(22)に同じ。544頁。
- (36) 同前。543頁。
- (37) 湖南省出身の留日学生、宏文学院で松本の教えを受けた。
- (38) 注(22)に同じ。545頁。
- (39) 松本亀次郎『中華留学生教育小史』(東亜書房 1931年)56—57頁。
- (40) 同前。57頁。
- (41) 『人民中国』(1981年7月号)94頁。趙安博は現在中日友好協会顧問、中国人民政治協商会議全員委員会委員。
- (42) 法学博士杉栄三郎は京師法学堂の同僚で、東亜高等予備学校創設時の協力者でもある。後に、東亜学校学監、宮中顧問室、帝国博物館長となる。増田実『松本亀次郎先生伝』(城東学園 1951年)である。1—3頁。
- (43) 注(1)に同じ。230—231頁。
- (44) 注(39)に同じ。74頁。
- (45) 同前。75—79頁を参考にまとめた。
- (46) 東亜高等予備学校は松本と政財界の有志の協力によって創設された留日学生の学校。吉沢・小谷野はその同僚。
- (47) 大正7年日華学会設立、1925年東亜高等予備学校と合併、侯爵細川護立が会長、その主事小川と共に視察旅行にでかけた。
- (48) 松本亀次郎『中華教育視察紀要』(東亜書房 1931年)124—125頁。
- (49) 同前。125—126頁。
- (50) 注(7)に同じ。歌人と謝野晶子、政治家松岡洋右、軍人本庄繁、その他日中関係者多数の礼状がある。
- (51) 同前。鈴木貫太郎の礼状(昭和6年9月9日)。
- (52) 同前。『読売新聞』(昭和20年4月9日社説「新内閣に望む」、4月10日「此の戦必ず勝つ」、『朝日新聞』(昭和20年7月13日、8月26日「新生日本の教育、対支国民外交の実践」)。
- (53) 鈴木貫太郎『日本人の自伝12』「終戦の表情」(平凡社 1981年6月)248頁。
- (54) 注(18)に同じ。285頁。「回想の松本先生」と題して汪向榮が平野日出雄に送ったもの。

〔附記〕

- ①本文の引用文献の漢字は原則として現在使用の漢字に改め、句読点は必要に応じて付加した。
- ②本稿で使用した資料の多くは掛川市立大東図書館内の「松本亀次郎文庫」のご厚意によるものである。

（たかはし よしえ 文学研究科東洋史学専攻修士課程修了）

（指導：清水 稔 教授）

2011年9月29日受理